

Georges Dumézilの研究に照らして見た、 スキュタイ、韓半島、および日本の神話の関係

吉田 敦彦*

I. はじめに

フランスの神話学者だった、故Georges Dumézilは、Titus Liviusや Sanko Grammaticusなどの歴史書、また『アエネイス』や『マハーバーラタ』などの叙事詩を次々に取り上げ、それらの文学作品を比較神話学的方法で、鮮やかに分析した。¹⁾ それによってこのような文学作品の中にしばしば古い神話の構造が、細部にまでわたって、驚くほどよく保存されている場合のあることが明らかになった。同じ方法でDumézilはまた、生涯にわたり非常な熟意をもって、コーカサス地方のオセット人のあいだに口承されている『ナルト叙事詩』の研究を、倦まずに続けた。²⁾ そしてその中で語られている英雄伝説から、古代ギリシアの歴史書などに書き止められたほんの僅かの断片を除いて、大部分が失われてしまったと考えられてきた、古代のスキュタイ人が持っていた神話の内容が、かなりの程度までよく復元できることを明らかにした。

このDumézilの膨大な研究に照らしながら、そのようにして復元できる

*日本 学習院大学。

1) G. Dumézil, *Mythe et épopée* I ~ III, Editions Gallimard (Paris), 1968, 1971, 1973 ; *Du mythe au roman*, Presses Universitaires de France (Paris), 1970などを参照

2) Dumézil, *Légendes sur les Nartes*, Librairie Ancienne Honoré Champion (Paris), 1930 ; *Le Livre des Héros*, Editions Gallimard (Paris), 1965 ; *Mythe et épopée* I, p. 439-575 ; *Romans de scythie et d'alentour*, Payot (Paris), 1978など。

と思われるスキュタイ人の神話の内容を、一方で『三國史記』や『三國遺事』、また他方で『古事記』や『日本書記』などの記事と比較してみると、それらのあいだにはいろいろな点で、とうてい偶然の所爲とは思えぬほど顕著な類似が数多く見出せる。『古事記』と『日本書記』に記された日本神話のいたるところに、韓半島の神話から強い影響と受けた明瞭な痕跡が見られることは、すでに三品彰英らの研究³⁾によって、周知のことになっている。だがそのことは、Dumezilの偉大な業績を参考にしながら、韓半島および日本の神話を、スキュタイ人の神話と比較してみることによって、さらに一層はっきりと確認できると思われる。

韓半島と日本の神話は、広大な視野を持った大神話学者デュメジルによっても、直接には研究の対象にされることがなかった。だが彼の研究の成果を利用することによってわれわれは、これらの地域の神話の成立過程や影響関係の解明も、多くの点で確実に前進させることができる。本稿ではそのことを、日本神話と高句麗の神話の関係、なか人づく前者のまさに中心に位置を占める女神アマテラスと、高句麗の王家の組母神であった女神柳花のあいだに見られる、きわめて密接な親近性の問題に焦点を絞って、非力の及が範囲で明らかにしてみたい。

Ⅱ. オセツト人の叙事詩伝説

北コーカサス地方に住み、現在でもスキュタイ語の系統を引く言語を話し続けているオセツト人のあいだには、口伝えで豊富な叙事詩的英雄伝説が伝っている。その中で活躍する英雄たちがナルトと呼ばれていることから、専門家はこの伝説を、オセツトの『ナルト叙事詩』と呼んでいる。

この伝説に語られているナルトたちの所行の中には、いろいろな点で、

3) 三品彰英『増補日鮮神話伝説の研究』(『三品彰英論文集』, 第4巻), 平凡社, 1972年, など。

現在の オセット人よりは、古代ギリシアの歴史家のHerodotusが伝えている。当時のスキュタイ人の風習と、奇妙と思えるようなところまで、ずっとよく一致しているものが、数多く見出せる。たとえばなるとたちの中でも特に大勇士であったソスランはあるとき、自分の武勇をいやが上にも際立たせようとして、大勢の敵を殺しその頭と上唇の皮を剥いだ。そしてそれらを材料にして女たちに、人間の皮でできた外套を縫わせた。⁴⁾ また別の大勇士のバトラズも、これとほとんど同じことをしたと語られている。⁵⁾ これとまさにそっくりの風習は、スキュタイ人のあいだに実祭にあった。Herodotusはそのことは、次のように伝えている。

スキュタイ人は(戦闘で殺した敵の)首級の皮を次のようにして剥ぎ取る。耳のあたりで丸く刃物を入わ、首級をつかんでゆすぶり、頭皮と頭蓋骨を離す。それから牛の肋骨を用いて、皮から肉をそぎ落とし、手で揉んで柔軟にすると一種の手巾ができ上がる。それを自分の乗馬の馬勒にかけて誇るのである。またスキュタイ人の中には、剥いだ皮も羊飼いの着る皮衣のように縫い合わせ、『自分の身につける上衣まで作る者も少なくない(『歴史』4, 64)。⁶⁾

ナルトたちはまたしばしば、アレガテという家の広間に集まって宴会を開く。そのおりには、この家に大切に保管されている。彼らの聖宝の酒杯が持ち出され、ナルトたちは順番に立ち上がって、手柄話をせぬばならない。もしその話が本当であれば、この魔法の酒杯は自然に酒でいっぱいになる。そして空中に浮かび、話し手の口許まで動いて行って、彼に美酒を飲ませる。だが話が嘘であれば、この奇跡は起こらない。それで話し手は酒が飲めぬ上に、人前で話せるような手柄を何もあげていないことを暴露されてしまって、満座の中でひどい恥をかかなければならぬ

4) Dumézil, *Le Livre des Héros*, p.81。

5) Dumézil, *Légendes sur les Nartes*, p.58。

6) ヘロドトス『歴史 中』(松平 千秋訳), 岩波文庫, 1972年, 40頁。

ことになるかとされている。⁷⁾ スキユタイ人のあいだパは、これとよく似た実祭にあった。そのことをわれわれは、Herodotusの次のような記述から知ることができる。

年に一度各地の長官はその管轄区で、水を割った酒の甕を用意し、スキユタイ人のうち戦場で敵を打ちとった手柄のあるものだけがこの酒を飲む。そのような武功のないものはこの酒を飲むことが許されず、恥辱を忍んで離れた席に坐っている。スキユタイ人にはこれが最大の汚辱なのである(『歴史』4, 66)。⁸⁾

これによればスキユタイ人のあいだでも、ただ手柄をあげた者だけが酒を飲むことのできる公式の酒宴が、定期的に行われていた。

そしてその酒宴の場で酒が飲めぬことほど男にとって大きな恥辱はないと考えられていたわけだ。ナルトたちがアレガテ家に集まってすると言われている宴会は、大筋で明らかにこのスキユタイ人の習慣と吻合している。なぜならおもな相違点はただ、スキユタイ人のあいだではそれぞれの地区の首長によってされていた、酒を飲む資格の有無の判定が、ナルトたちの酒宴の場では、魔法の酒杯によって下されたとされていることだけだと思われるからだ。

その上また、この叙事詩の中で活躍しているおもなナルトたちは、人間の英雄だったことになっているが、その性質は実祭には、人間より神話の神々にずっとより近い。たとえばバトラズは、全身が鍛えられた鋼鉄できており、ふだ人は天上で暮らしている。そして下界を見張っていて、自分の武勇が必要とされる事態が発生すると、地上に降下してくる。そのときには彼は、身体が赤熱するのを冷ますために、頭に氷河の塊を載せているので、降下の途中でそれが解け、その水が沛然たる豪雨になって、

7) Dumézil, *Romans de Scythie et d'alentour*, p.225-236など。

8) 前掲訳書, 41頁。

地上に降り注ぐと言われている。このバトラズの性質はこのように、あらゆる点でまさしく、赤熱し雨を伴て地上に落下してくる雷の神を彷彿させる。⁹⁾

またソスランは、母の腹からではなく、川岸で大きな岩の中から出生した上に、太陽の娘と結婚したことになっている。その上に、太陽の熱と光がもっとも強くなる正午に、武勇でも他のことでも、最大の力を発揮することができた。また身体につけた護符から発せられる眩しい光によって、敵の目をくらませて、戦いに勝つこともあったと物語られている。このソスランの性質は、いろいろな点で明らかに、太陽の神に近いと思われる。¹⁰⁾

これらの点から見て、『ナルト敍事詩』は全体として、スキュタイ神話が英雄伝説に變化しながら、現代まで口伝えで伝承されてきたもので、その中に古代の神話の内容が、きわめてよく保存されていることが、确实だと思われるのだ。ところでその『ナルト敍事詩』は、次のような話によって始まっている。¹¹⁾

ナルトたちの村の果樹園には、一本のりんごの木があった。その果実には、どんな傷でも病氣でも治す、不思議な力があつた。だが実は一日に一つしかならず、その日のうちに熟してちようど食べごろになるが、夜のあいだにきまって、何者かによって盗人の姿を目撃したものもなかった。

ある夜エフサルトエフセルテグという雙兒の兄弟が、見張いの役をとめることになった。兄弟は二人とも勇士で弓の名人だったが、弓の腕前にかけても他の武勇でも、弟の方が兄よりもいっそう貞越していた。

弟は兄を眼らせ、一人で終夜見張いを続けた。夜明け間近に、どこからともなく三羽の鳩が飛人で来て、光を放ちながらりんごの木によまり、実

9) Dumézil, *Légendes sur les Nartes*, p.179-189など。

10) 同書 p.190-199など。

11) Dumézil, *Le Livre des Héros*, p.24-31。

をついばもうとした。エフセルテグはすかさず矢を射て、一羽の鳩に傷を負わせた。だがその鳩は、他の二羽といっしょに、たちまち逃げ去ってしまった。

地面には鳩の傷から流れ落ちた。血の跡が見られた。エフセルテグは、その血のしずくを拾い上げ、絹の布に包人で帯にはさんだ。夜が明けると彼は兄といっしょに、血の跡をたどって行った。すると海邊に行き着き、そこで跡が途絶えていた。エフセルテグは兄に、「一年間ここで自分の帰りを待っていてもらいたい」と言い残して、一隣で海低に降りて行ってみた。

そうするとそこには、壁は螺鈿、床は青ガラスでできていて、天井には成が輝いている眩しい建物があつた。それは海の支配者のドンベツテュルと、その家族の住居だつた。中に入ると広間があり、ドンベツテュルの七人の息子と、その姉妹である二人の美女が坐つていた。彼らは悲嘆にくれている様子だつたので、わけを尋ねると、兄弟は口をそろえてこう言つた。

「われわれには三人の姉妹があり、毎夜、ナルトのりんごの実を盗みに行つていたが、昨夜その一人のゼラセが、エフセルとエフセルテグが射た矢に当たつて、中傷を負つて帰つて來た。彼女をこんな目にあわせた、憎いあこんのナルトが、どうか劍でだがいに刺しあつて、二人ともに横死を遂げるように」。

ゼラセの傷を治す方法はないのかと尋ねると、彼らは、「彼女が流した血を集めて來て、吹きかけてやる以外には、治療法はない」と答えた、また「傷を治せせば、何を報酬にもらえるか」と質問すると、彼らは、「その者には、ゼラセを妻として与える」と言つた。エフセルテグはそこで、自分がだれであるかを打ち明け、血を集めて持つて來ているので、傷を治療しようと申し出た。

病室に行つてみるとゼラセは、編人だ黄金の髪が床まで重れ、顔には太

陽の笑みを，乳房には月の輝きを宿した，眩しい美女だった。血を吹きかけると，たちまち傷が癒え，それまでよりさらに七倍も美したなって，寢床から跳び起きた。

エフセルテグはこの美女と夫婦になり，しばらくは海低で夢のように幸福に暮らした。だがある日，とつぜん兄のことを思い出し，ゼラセにわけを話して，地上に帰らねばならないと言った。するとゼラセは「それならば，自分も同行する」と言っ，黄金の髪を一筋抜き，それで自分と夫をたちまち，二尾の大魚に變えた。

海岸に泳ぎ着いた二人が，人間の姿に戻って上陸してみると，一幹の小屋があった。それはエフセルが，弟の帰りを待たために建てたものだったが，エフサルは狩に出かけていて留守だった。エフセルテグはそこで，妻をこの小屋の中で休ませておいて，兄を探しに行った。

そうするとそれとちようど入れ違いに，エサルが小屋に帰って來た。兄弟は見分けがつかぬほど，よく似ていた。ゼラセはそれで，てっきり夫が帰って來たと思ひこみ，近寄って話しかけた。エフサルは，ゼラセが弟の連れ帰った妻であるらしいと察し，憤み深く口を噤人だまま，彼女から遠ざかった。ゼラセはそのために，夫が他界から來た自分を邪魔に思ひ，知らぬ振りをしていると思ひこんで，憤慨した。

夜になるとエフサルは，自分の外套を敷いた上にゼラセを寝かせ，上から弟が残して行った外套をかけてやった。この親切で，ゼラセの心も，いくらかなごみかけた。ところがエフセルはそれから劍を抜き，それを眠っているあいだに身体が触れ合わぬように，自分とゼラセの中間に置いた。ゼラセはそれをついに，怒り心頭に発して立ち上がり，部屋の隅に行き，うづくまって泣き出した。

ちようどそのよき，エフセルテグが小屋に帰って來た。そしてこの様子を見て，妻が兄から凌辱を受けたと早合点し，やにわに劍を抜き，兄を刺し殺してしまった。

そのあとでゼラセから事情を説明されて、彼は自分が、妻に対して一点の非の打ち所もない振舞をした兄を、早まって殺してしまったことを知った。絶望した彼は、やにわに劍を、柄を兄の死体の胸に当てて直立させた。そしてその上に倒れ、自分の心臓を劍で貫いて死人だこれによってゼラセの兄弟たちが、海底の館をエフセルテグが訪れたときに口にした、「エフサルとエフセルテグが、劍でたがいに刺し合して横死するように」という呪いの言葉が、その通りに成就したことになった。

ゼラセはこのあと、空中から降りて來たりワステュルジという精靈に墓を作らせ、そこに夫とその兄の死体を埋葬させてから、いったん海底に帰った。だが彼女は、すでにエフセルテグの子を妊娠していた。臨月になると彼女は、「ナルトの子は、ナルトの村で生まねばならぬ」と母に言われ、また陸に上がってナルトの村にやって來た。そして自分が死人だエフセルテグの未亡人で、彼の子を生もうとしていることを、ナルトたちに告げてから、亡夫の家に行き、その家畜小屋に入って、そこでウリュズメグとヘミユツという雙兒の男の子を、あわただしく出産した。

Ⅲ 日本神話とスキユタイ神話の類似

オセツト人の伝説の中のこの話にはまず、いろいろな点で明らかに、日本神話の中の山幸彦のホヲリまたはヒコホホデミとトヨタマビメの結婚の話と、よく似たところがある。なぜならまず、この話の主人公のエフセルテグには、エフサルという雙兒の兄がいる。これは言うまでもなく、山幸彦のホヲリと、その兄の海幸彦のホデリとの関係とそっくりだ。その上エフセルテグは、弓の名人だったとされているので、この点でもホヲリが、弓矢で獲物を狩り取る名人の山幸彦だったのと吻合している。またエフセルテグは、鳩る矢を射当てながら逃げられてしまって、その跡を追って海底に行ったことになっている。ホヲリは釣針を取り戻すために、

海神の宮に行った。つまりどちらも、獲物を取り逃がしたことがきっかけになって、海中の他界を訪問することになったとされているわけだ。

どちらの話でも主人公は、海の支配者の壮麗な住居を発見している。『日本書紀』に、「其宮也城闕崇華，樓臺壯麗」とも、また雉堞整頓，臺宇玲瓏」とも言われて、この世にはあり得ぬ目映さと美しさを強調されている海神の宮の描寫は、Dumézilによって次の海神の訳されている。『ナルト敘事詩』の中のドンベツテユルの館の描寫と、明らかに吻合するところがあるように感じられる。

Voici comment était cette maison : des murs de nacre, un plancher de verre bleu, et, au plafond, l'étoile du matin.¹²⁾

このような海の支配者の住居で、どちらの主人公も、その住居の主の娘と結婚している。そしてそこでしばらくのあいだ、夢のように幸福な暮らしをしている。

そのあとでどちらの話の主人公も、ある日とつぜん兄とした約束を思い出して、地上に帰る。そしてどちらの話でも主人公は、兄と激しい衝突をしたことになっている。

どちらの話でも主人公の妻は、子を生むために、海から出て陸に上がって来ている。トヨタマビメは、『古事記』によれば、そのときこう言っているとされている。

妾已妊身。今臨産時。此念，天神え御子，不可生海原。故，參出到也。

これもゼラセが、Dumézilの訳によれば、母にこう言われた。

Va t'installer sur la colline des Nartes, Ils sont ainsi faits que celui qui n'est pas né sur leur colline, ils ne le reconnaissent pas pour l'und'eux.¹³⁾

12) 瓦書, p.26。

13) 瓦書, p.30。

それで出産のために、海から出て、丘の上にあるナルトの村にやって来たとされているのと、似たところがあると思える。またゼラセが、亡父の家に来て、その母屋に当たる部分には入らず、家畜小屋の部分であわただしく出産したとされているのも、トヨタマビメが波打ちぎわに急造された、まだ未完成の産殿で分娩したとされているのと、やはり似た点があるように感じられる。

前述しである可能性が強い。オセットの『ナルト紋事詩』の中の話し、日本神話とのあいだに、このようにいろいろな類似点が見られることは、偶然の所爲ではないと思われる。なぜなら、日本神話と古代スキュタイ人の神話とのあいだには、もっとも肝心と思えるような部分に関して、明らかに顕著な類似があった。そのことをわれわれは、Herodotusが彼の時代にスキュタイ人のあいだで語られていた神話について残してくれた、短いがきわめて貴重と思える。次のような証言から、はっきりと確認できるからだ。

スキュタイ人のいうところによれば、自分たちは世界の民族中最も歴史の新しい民族で、その生成の経過は次のようであったという。当時無人の境であった彼らの国土に最初に生まれたのは、タルギタオスという名の男であった。このタルギタオスの両親は—彼らはともかくそういうのである—ゼウストボリュステネス河の娘とであったという。タルギタオスの出生はこのようのものであったというのであるが、タルギタオスからはりボクサイス、アルボクサイスおよび末子としてコラクサイスの三子が生れた。この三人が支配していた時代に、天から黄金製の器物—鋤に軛、そわに戦斧と盃—がスキュティアの地に落ちてきて、長兄が一番にこわを見付け、それを取ろうとして近付いたところ、その黄金が燃え出した。長兄が離れた後次兄が近付くと、黄金はまたしても同じことを繰返した。こうして黄金の器物は燃えて二人の兄を近付けなかったのであるが、三番目に末弟に王権をことごとく譲ることに同意した、というのである(『歴史』4, 5)。¹⁴⁾

14) 前掲訳書、9-10頁。

ポリュステネス河というのは、現在のドニエプル河であり、またここでHerodotusがゼウスと呼んでいる神を、スキュタイ人自身はパパイオストイウ名で呼んで崇めていたことが、『歴史』の中の別の個所における記述から知られる。¹⁵⁾ このパパイオスは、ヘロドトスガゼウスと同一視したことからみて明らかに、ギリシア神話のゼウスと似た、天上の最高神だったに違いない。

またドニエプル河は、ヘロドドスがこの神話を聴聞した地方のスキュタイ人にとっては、エジプト人にとってのナイル河ともほとんど匹敵するような、国土のあらゆる資源の源泉に近い意味を持っていた。そのことは、この河についてHerodotusがしている。次の記述からも、明らかだと思われる。

筆者の見解によれば単にスキュティアの河川のみならず全世界の河川の内でも、エジプトのナイル河を除いては最も資源に富む。ナイルのみは他のいかなる河とも比較を絶しているからで、その他の河川中ではポリュステネス河が最も資源に富み、家畜の飼育用に最も良質で豊富な牧場もあれば、質も量も他に類のない魚類を産し、その水は飲用に最も好適である。附近の他の河川が濁っているのに、この河の流れは清く澄み、またこの河岸一帯は穀物の栽培によく適し、耕作の行われないところでは草が見事に繁茂している。また河口のあたりでは多量の塩が自然に結晶しており、また塩干魚に加工されるアンタカイオイという脊椎の大魚を産するなど、このほかにも驚異に値するさまざまな産物がある(『歴史』4, 53)。¹⁶⁾

この河の主の神をスキュタイ人は、したがってとうぜん、水界の支配者と思なしていたと思われる。つまりHerodotusのこれらの証言から、スキュタイ人の神話には、天上の最高神であるパパイオスがあるとき、地上に降りて来て、殊界の主の神の娘と結婚した。そしてその結婚から、スキュ

15) 同訳書，38頁。

16) 同訳書，35－36頁。

タイ民族の始相で最初の王の父親でもある、タルギタオスが誕生したと語られていたことが知られるわけだ。

そうするとこのスキュタイ神話にはまず明らかに、すでに触れた日本神話の中のホヲリとトヨタマビメの結婚の話と、よく吻合するところがある。なぜなら『古事記』によれば、トヨタマビメの父のワタツミは、ホヲリに失くした釣針を鯛の喉から取り戻してやった上で、地上に帰らせるに当たって、こう言ったと言われている。

然而，其兄作高田者，汝命營下田。其兄作下田者，汝命營高田。爲然者，吾掌水故三年え間，必其兄貧窮。

つまり日本神話でワタツミは、ただ海の水だけでなく、雨の水も自由に降らせたり降らせなかつたりすることができる、まさに水界全般の支配者のような力を持っていたことになっているわけだ。

一方またホヲリは、自分が天から降りて来たわけではないが、高天原の女王アマテラスの嫡流を引く、もっとも尊貴な天神であったことになっている。事実ワタツミは『古事記』によれば、彼をはじめて見たときに、「此人者，天津日高え御子，虚空津日高矣」と言った。そしてさっそく宮殿の内に招き入れ、「美知皮え疊敷八重，絳楹八重敷其上，坐其上而，具百取机代物，爲御饗」と言われているような、そのような尊貴な天神にまさに相応しい最高のもてなしをした上で、彼をトヨタマビメと結婚させたと言われている。

つまりこの神話でも、天上の最高神ではないが、その嫡宗の子孫でそれとよめて近い性質を持った天神が、下界で水界の主の神の娘と結婚したことになるのだ。その上またこの結婚から生まれた子のウガヤフキアヘズは、初代の天皇の神武天皇とその兄たちの父親になったとされている。これはスキュタイ神話でも、パパイオス(ニゼウス)とポリュステネス(ニドニエブル)河の神の娘との結婚から生まれた、タルギタオ

スがやはり，スキュタイ人の最初の王になったコラクサイスと，その兄たちの父親だとされているのと，まさにそっくりだ。

その上前掲，たHerodotusの伝えているスキュタイ神話の中には，いま述べた点のほかにもまだ，日本神話と著しく類似したところのある話が含まれている。それは天から降下して来て，王家の始祖の手に入り，そのことが彼が王であることの紛うかたのないしるしとなったとされている。器物のことを物語った話だ。こわらの寶器はherodotusの時代にもなお，スキュタイの王家に実祭に相伝されていた。そして歴代の王たちは，それらを何よりも尊び，まるで神のように祭っていたので，Herodotusはそのことを，こう説明している。

かの黄金製の器物は，歴代の王が何にもまして大切に保管し，年ごとに盛大な生贄を捧げて神のごとく敬い祀っている。祭礼の際野外でこの黄金の聖器を奉待しているものが眠った場合には，この者が一年以内に死ぬという言い伝えがスキュタイアにはある。そのためにこの役の者には，彼が騎馬で一日間に乗り廻すことのできるだけの土地が与えられるのであるという(『歴史』4, 7)¹⁷⁾

このスキュタイ王の聖器には明らかに，日本の皇室の三種の神器と，よく似たとところがある。なぜなら日本の三種の神器も，神話の中で，皇室の始祖のために，王権のあらたかなしるしとして天から降されたと物語られている。そして歴代の天皇によって，まさに何よりも尊ばれて，神として祭られてきているからだ。

Herodotusの文章を，訳文によって一見すると，スキュタイ王の聖器は，四点の品から成り立っているように見える。だが前掲した松平千秋の訳文で，「鋤に輓，それに戦斧と盃」と，的確に訳出されているように実は，ギリシア語の原文はἀροτεόντεκάισυρόν καί σαρῶρον καί φάλζνべ，その

17) 同訳書，10頁。

中で「鋤」と「軛」を意味する語 $\alpha\rho\theta\epsilon\omicron\nu$ と $\Sigma\rho\acute{o}\nu$ はという接続詞句によって、結び付けられている。これは言うまでもなく、特に緊密な結合を長わす場合に使われる表現で、 それに続く「戦斧」と「盃」をそれぞれ意味する語の前に置かれている。通常の接続詞の $\kappa\alpha\iota$ とは意味に明らかに相違がある。

それでは Herodotus はいったいなぜここで、 $\alpha\rho\theta\epsilon\omicron\nu$ と $\Sigma\rho\acute{o}\nu$ のあいだにだけ、 $\tau\epsilon\kappa\alpha\iota$ を使ったのだろうか。そのことについての説明は、フランスの大言語学者だった Emile Benveniste によって、はっきりとつけられている。¹⁸⁾ それによれば、ゾロアスター教の聖典の『Avesta』の中で用いられている古代イラン語には $ae\check{s}a = yugo.s\grave{a}mi$ という一語の合成語があり、それによって犁とそれを先に取り付けるための木の柄のついた軛とが、全体で一点の農具として言い表わされている。このアヴェスタ語に対応する合成語は、古代ギリシア語にはなかった。だがガイラン語の方言の一つだったスキュタイ語には、あったと想像できる。

スキュタイ王の聖器の「鋤」と「軛」はそれだからスキュタイ語ではもともとは、この $ae\check{s}a = yugo.s\grave{a}mi$ に当たる合成語によって言い表わされていた。つまりそれらは、二点の別々の品ではなく、合わさって一点の農具を構成すると観念されていたので、その不離一体の結合関係を、兩者を一体的に表わす合成語を持たぬ古代ギリシア語によって表現するために、Herodotus はここで $\tau\epsilon\kappa\alpha\iota$ を使ったと考えられるのだ。

このようにスキュタイ王の聖器は、もともと四点ではなく、犁と軛の合わさった農具と、戦斧と、盃との三点だったので、日本の三種の神器と、数の上でも一致していたことになる。

18) E. Benveniste, "Traditions indo-iraniennes sur les classes sociales", *Jornal Asiatique*, 230, 1938, p.533.

IV. 高句麗神話と『ナルト叙事詩』の類似

天から降りて来た神と、水の主の神の娘との結婚から、王家の始祖が誕生したという神話は、古代の韓半島にもあった。それは言うまでもなく、高句麗の始祖の東明王となった朱蒙の出生の顛末を物語った話で、『旧三國史』にはその神話は、こう記されていた。

天帝遺太子降遊扶余王古都，号解慕漱，從天而下，乘五龍車，從者百余人，皆騎白鶴，彩雲浮於上，音樂動雲中，止態心山，經十余日始下，首戴鳥羽之冠，腰帶龍光之劍，朝則聽事，暮即升天，世詐之天王郎，城北青河河伯，有三女，長曰柳花，次曰萱花，季曰葦花，三女自青河出遊態心淵上，神姿艷麗，雜佩鏘洋，与漢鞭無異，王謂左右曰，得移爲妃可有後胤，其女見王，即入水，左右曰，大王何不作宮殿俟女入室当戶遮之，王以爲然，以馬鞭画地，銅室俄成，壯麗於空中，王設三席置樽酒，其女各坐其席，相歡飲酒，大醉云云，王俟三女大醉急出遮，女等驚走，長女柳花爲王所止，河伯大怒遣使告曰，汝是何人，留我女乎，王報云，我是天帝之子，今欲与河伯結婚，河伯又使告曰，汝若天帝之子，於我有求婚者，当使媒云云，今輒留我女，何其失礼，王慙之，將往見河伯，不能入室，欲放其女，女既与王定情，不肯離去，乃勸王曰，如有龍車可到河伯之國。王指天而告，俄而五龍車從空而下，王与女乘車，風雲忽起，至其宮，河伯備礼迎之，坐定，謂曰，婚姻之道，天下之通規，何爲先礼，辱我門宗云云，河伯曰，王是天帝之子，有何神異，王曰，唯在所試，於是河伯於庭前水，化爲鯉隨浪而遊，王化爲鹿而捕之，河伯又化爲鹿而走，王化爲豺逐之，河伯化爲雉，王化爲麗擊之，河伯以爲試是天帝之子，以礼成婚，恐王無將女之心，張樂置酒，勸王大醉河伯之酒七日乃醒，与女入於小革輿中，載以龍車，欲令升天，其車未出水，王即酒醒，取女黄金釵刺革中輿，從孔独出升天，河伯大怒其女曰，汝不從我訓，終辱我門，令左右絞挽女口，其唇吻長三尺，唯与奴婢二人，貶於優渤水中，優渤沢名，今在太伯山南。

漁師強力扶鄒告金蛙曰，近有盜梁中魚而將去者，未知何獸也，王乃使漁師以網引之，其網破烈，更造鉄網引之，始得一女坐石而出，其女唇長不能言，令三牖其唇內言，王知天帝子妃，以別宮置之，其女懷牖中日曜，因以有娠，神雀四年癸亥歲夏四月，生朱蒙，唵声甚偉，骨表英奇，初生。左腋生一卵，大如五升許，

王怪之曰，人生鳥卵，可爲不祥，使人置之馬牧，群馬不踐，棄於深山，百獸皆護，雲陰之日，卵上恒有日光，王取卵送母養之，卵終乃開，得一男，生未經月，言語並爽，謂母曰，群蠅嚼目不能睡，母爲我作弓矢，其母以藁作弓矢与之，自射紡車上蠅，發矢即中，扶余謂善射曰 朱蒙。

この高句麗神話は一方で、天神の種によって妊娠し、王家の始祖を生人だとされている女神が、河の神の娘だったとされているので、その点では Herodotus が伝えているスキュタイ神話の中のゼウス＝パパイオスとポリュスデネス＝ドニエプル河の娘との結婚の話と吻合している。だが他方でこの神話では、天から地上に降りて来て、その河神の娘の女神と結婚した天神は、天上の最高神である天帝自身ではなく、その天帝の太子だったとされている。その点ではこの高句麗神話は明らかに、高天原の女王アマテラスの子孫である天神のホヲリと、水の主の神の娘トヨタマビメとの結婚をもって物語いる、日本神話の方により近い。つまりこの高句麗神話には、これらの点においてまさしく、スキュタイ神話と日本神話とのちょうど中間的と言えるような形が、見られるわけだ。

またこの話で、天王郎の解慕漱は、水中にある宮殿に行き、そこで水界の支配者の娘と結婚するが、その結婚はけっきよ破局によって終わっている。しかも夫と別れたあとで妻の女神は、水中から陸に上がって来た。そしてそこでお産をしたことになっているので、これらの点でもこの高句麗神話の筋は明らかに、トヨタマビメの話とも、また『ナルト敍事詩』の中のゼラセの話とも、基本的に吻合している。

その上高句麗神話には、このほかにもまだいろいろな点で、『ナルト敍事詩』のゼラセの話と、奇妙によく似たところがあるのだ。まずこの神話で河の神の娘は、三人姉妹だったことになっている。そして三人がいっしょに陸に上がって来たところでその一んの柳花だけが解慕漱にあって捕えられ、その妻になったとされている。

『ナルト敍事詩』でもこれと同様に、水界の支配者のドンベツテユルの

娘たちはやはり、すでに見たとおり三人姉妹だったことになっている。そして彼女たちもやはり、三人いっしょに水から出て、陸上のナルトの果樹園にりんごの実を盗みに来た。そしてその中の一人のゼラセだけが、エフセルテグによって矢を射当てられて、彼と結婚したとされている。

また高句麗神話で解慕漱は、柳花に求婚するために馬の鞭を使い、たちまち建物を出現させるという、不思議な魔法を行使したとされている。『旧三国史』にはそのことは、すでに見たように、「以馬鞭画地，銅室俄成，壯麗於空中」と記されている。

これとそっくりと言えるほどよく似た挿話は、実はゼラセの話にも出てくるのだ。なぜならゼラセは前述したように、夫が兄を殺したよに自分も自害して果ててしまったあとで、その兄弟の遺骸を、ワステュルジという精霊に葬らせた。そしてその上で海底に帰ったことになっているが、その詳しい顛末は次のようであったと、物語られているからだ。¹⁹⁾

二人の遺体を前にして、一晩中泣き明かしたゼラセは、夜明けに、非かな女の身でどうやって墓穴を掘り、重い亡骸を埋葬できるだろうかと思いい惱人でいた。そうすると彼女の前にとつぜん、いつも三本足の悍馬に乗り、一頭の獵犬を連れて空中を駆けまわっている、亂暴者のワステュルジという精霊が降りて来た。彼はかねてから、ゼラセの美貌に懸想し、言い寄る機会を狙っていたのだった。

彼はゼラセに、「もし自分と結婚してくれるなら、すぐに立派な墓を作って、兄弟の遺體を葬ってやる」と言って、求婚した。そしてゼラセが承諾の返事をする、ただちに手に持っていた馬の鞭の柄で、紙面を叩いた。そうするとDumézilの訳によれば、次のようにして、紙面にたちまち墓穴が開いたとみるまし、屍体が二体ともその中に納まり、次の瞬間にはもうそのよに壮麗な墓石が立ち、まわりには石灰で純白に塗られた石の

19) Dumézil, *Le Livre des Héros*, p.29-30。

壁がめぐらされていたと物語られている。

Uastyrdji frappa la tere du manche de son fouet : les corps des deux frères se placèrent d'eux-même dans une fosse, et, sur la fosse, surgit une piene tomfale merueilleuse, ainsi que, tout autour, un mur fait de chaux et de pierre.²⁰⁾

ワステュルジはそれかう、ゼラセを妻にするために連れて行こうとした。だがゼラセは、その前に血で汚れた身体を洗い清めてくるからと言って、彼をその場に待たせておいて海中に入った。そしてそのまま、海底の父の館に帰って行ってしまった。

ワステュルジは、かねてからの思いがようやくかなうという期待に胸をとりめかせながら、待っていた。だがいつまでもゼラセが戻って来なかったので、しまいによりやく騙されて待ち惚けを食わされたことに氣づいた。

「この仕打ちには、きって仕返しをしてやる。たとえこの世で捕えそこなっても、死者のあいだまでも追って行き、きとお前をわたしのものにしてやる」。

ワステュルジは慷慨悲憤してこう言いながら、しかたなくまた三本足の悍馬に跨がり、獵太を連れて空中に昇り駆け去って行った。

このように『ナルト敍事詩』の中でも、空から降りて来た神的存在が、水の主の娘と結婚しようとして、馬の鞭を使いまたたくまに立派な建造物を出現をせるといふ魔法を行使したということが、物語られているゆけだ。たしかにこの話ではワステュルジは、高句麗神話の解慕漱の場合とはちがって、この不思議な魔法を使ったにもかかわらず、ゼラセにまんまと騙され、逃げられてしまって、求婚に失敗したことになる。だがワステュルジはしまい、何とも凄絶なやり方について、ゼラセに対する

20) 同書、30。

情慾を遂げたことになっている。そしてそのおりに彼はまた、馬の騙を使って不思議を起こす魔法を行使したとされており、その顛末は次のようであったと物語られているのだ。²¹⁾

臨終の床でゼラセは、息子たちにこう遺言した。

「わたしを葬ったあと、どうか三晩のあいだは、墓をしっかりと見張っていてください。わたしには執念深い債権者がいるので、きっと墓の中まで、負債を取り立てにやってくるでしょうから」。

それでゼラセが死に、葬成をすませたあと最初の二晩は、兄ウリュメグが怠らずに墓の番をいた。そのあいだは、何も変わったことは起こらなかった。

三日目の番には、ウリュズメグの反対を押し切って、弟のヘミュツが墓の番に立った。そうするとやがて遠くの方から、楽しそうな宴会の物音が聞こえて来た。それを聞いているうちにヘミュツは、死者の言いつけに従っているのが馬麗らしく思えてきた。そして墓のそばを離れ、自分も歡樂の仲間入りをしようとして、音のする方へ去って行ってしまった。

そうするとこの機会を待ちかまえていたワステュルジが、たちまち墓室の内部を明るくしながら、中に入りこんだ。そして馬の鞭で遺体を打ち、生氣を取り戻させた上に、生前よりさらに七倍も美しくした。そしてその身体を犯した上で、また鞭で打とうそれはたちまちもと通りの生氣のない死骸に戻ったとされており、そのことはDumézilの訳によれば、こう物語られている。

*A peine s'éfait--il éloigné que la tomle s'illumina : Uastyrdji éfait déjà à l'intérieur! Il frappa Dzerassae de son fouet de feutre, et la uoici aept fois plrs eëlle que de son vivant. Il s'approcha d'elle, Puis il la frappa de nouveau avec son fouet de fentre, et elle redevint ce qu'elle était.*²²⁾

21) 同書, p. 34-35.

22) 同書, p. 35.

『ナルト敍事詩』にはさらにまた、すでに見たように冒頭で、弓の名人の英雄が、樹の下にいるところに、水の主の娘の變身した鳩が飛人で来てその樹に止まった。英雄はそこでその鳩に矢を射当てたが、あとでその傷を癒したということが物語られている。高句麗の建国神話の中には、これと奇妙によく似た話も出てくる。それは『旧三国史』に、次のように記されていた話だ。

朱蒙臨別，不忍睽違，其母曰，汝忽以一母爲念，乃裹五穀以送之，朱蒙自切牛別之心，忘其麥子，朱蒙息大樹之下，有雙鳩來集，朱蒙曰，應足神母使送麥子，乃引弓射之，一矢俱拳，開喉得麥子，以水噴鳩，更蘇而飛法。

朱蒙はすでに見たように、『旧三国史』の記事の中で、生後一月も経たぬうちにもう、まわっている糸車の上の蠅を射落とすほどの弓の名手だったとされている。その朱蒙が大樹の下にいるところに、河の神の娘である柳花から送られた二羽の鳩が飛んで来て、その樹に止まった。この鳩は、三品彰英が「母の別態である鳩」と言っているように²³⁾、柳花自身の變身した姿と見ることも、できそうに思われる。そして『ナルト敍事詩』で、エフセルテグが、水の主の娘ゼラセの變身した鳩を射たように、朱蒙を柳花の「別態」とも思えるこの鳩を射た。そしてそのあとで、エフセルテグがゼラセに血を吹きかけてその傷を治じたように、朱蒙も射落とされた鳩に水を吹きかけて、蘇生させてやったと言われている。

『ナルト敍事詩』にはまた、前掲した冒頭の話のあとに続いて、ゼラセの生人だエフセルテグの雙兒の息子ウリュズメグとヘミユツを主人公にする、次のような話が語られている。²⁴⁾

奇蹟的な速度で成長した雙兒が、弓矢を玩具として扱えるようになって

23) 三品彰英『古代祭政と穀靈信仰』(『三品彰英論文集』、第5巻)、平凡社、1973年、49頁。

24) Dumézil, *Le Livre des Héros*, p.32-34。

たとき，ある日彼らは，路上に出てこの遊戯に耽っていた。するとそこに，クルバデグという名の女子言者の娘が，母に水を汲んで来るように命令されて，家から出て来た。その姿を見るやいなやヘミュツはたちまち一本の矢で，彼女の待っていた大きな木の水差しの器を粉碎すると同時に，身に着けていた衣服まで，ずたずたにしてしまった。

彼女は泣きながら家に逃げ帰って，ヘミュツが自分にしたひどい悪戯を，母に訴えた。母は彼女に別の器を与え，ヘミュツがまた同じことをしたら，彼に向がって言，てやるべき言葉を教えて，再び水汲みに行かせた。家の外に出るやいなや，ヘミュツがまたまた彼女に矢を射かけた。そこで彼女は，母に教わった通り，こう言って彼を罵った。わたしのような，小鳥よりもか弱い者を相手に腕試しをして恥ずかいくないの。そんなに腕自慢なのなら，よいことを教えてあげよう。あなたたちの祖父のウエルヘグは，ナルトたちの家畜の群れの後を追いかけて歩くうちに，すっかりひからびてしまっているよ。嘘だと思ふなら，調べてごらん」。

これを聞くと雙児の兄弟は，ただちに自分たちの弓矢を折り，全速力で家に帰って，母のゼラセに言った。

「われわれはすぐ村の広場に行って，ナルトたちに尋ねねばなりません。わたしたちの組先が，まだ一人生きています。どうしても，彼は見つけなければ」。

それから彼らは広場に行き，そこに坐っていたナルトたちと挨拶を交した上で，こう言った。

「わたしたちの父の父であるウエルヘグが，ナルトたちの家畜の番をさせられていると聞きました。それで彼がどこにいるのか，あなたたちから教わりに来たのです」。

そうするとナルトたちは，一人の少年に命じて，ウリュズメグとヘミュシを，ウエルヘグのいるところへ案内させた。エフサルとエフセルテグが行方不明になってから，彼はそこで，家畜の番をさせられていたのだっ

た。雙児は祖父を家に連れ帰り、若返りを遂げさせた上で、彼を自分たちの父と呼んで、母のゼラセと結婚させた。

このように『ナルト敍事詩』でも、水の主の娘のゼラセから生まれた子は、奇蹟的な速さで成長した。そして弓の名人で、幼時から弓を射る遊びに耽っていたことになっている。

この話はその点でまず、高句麗神話でもやはり、河の神の娘の柳花から生まれた朱蒙が、生後一月経たぬうちにもう、言葉が話せるほど速く成長した。そして母に作ってもらった弓矢で、糸車の上の蠅を射落す遊びに耽ったと言われているのと、明らかによく吻合している。

それだけではない。『三国史記』に記された、高句麗の建国譚の中には、このオセツト伝説と、まさにそっくりと思えるような話が出てくる。それは朱蒙の息子で、第二代の高句麗王となった、琉璃明王の類利を主人公にする、次のような話だ。

琉璃明王立，諱類利，或云 孺留，朱蒙元子，母礼氏，初朱蒙在 扶余，娶礼氏女 有娠，朱蒙帰後乃生，是爲 類利，幼年 出遊 陌上 彈 雀，誤破 汲 水婦人瓦器，婦人罵 曰，此兒無 父，故頑 如 此，類利慙，帰 問 母氏，我父何人，今在 何処，母曰，汝父非常人也，不 見 容 於 国，逃 帰 南地，開 国稱 王，帰時謂予曰，汝若 生 男子 則言，我 有 遺物，藏 在 七稜 石上 松下，若能得 此者，乃 吾子也，類利聞 之，乃 往 山谷 索 之，不 得，倦 而還，一旦在 堂上，聞 林 礎間若 有 声，孰而見 之，礎石有 七稜，乃 搜 於 往下，得断劍一段，遂持 之，与 屋智・句鄒・都祖等三人 行至 卒本，見 父王，以 断劍 奉 之，王出 己所 疏断劍 合之，連爲一劍，王悅 之，立爲 太子，至 是繼 偉。

つまりウリュズメグとヘミュツと同様に、類利もまだ母の胎内にいるうちに父母が別れてしまったために、父を知らずに母の手で育てられた。そしてウリュズメグとヘミュツが、路上で矢を射て遊人でいたとように、彼も路上で雀を撃つ遊びに興じていた。

ヘミュツと同様に彼も、そこに水を汲みに出て来た婦人が持っていた

器を、割ってしまった。そしてそのことを怒って彼は罵った被害者の婦人の言葉を聞いて、愕然として母のもとに帰った。

ウリュズメグとヘミユツは、このことがきっかけとなって、祖父の存在を知った。そしてその居場所を尋ねて行って、対面を遂げた上に、その祖父と父と子の関係を結んだとさせている。これは類利がやはり、この事件がきっかけとなって、母の口からまだ見ぬ父の消息を聞き出した。そしてそのもとまではるばる訪ねて行って対面し、嗣子として認知されることができたとされているのと、本当に驚くほどよく似ている。

V. 柳花とアマテラスの類似

『ナルト紋事詩』とのあいだに見られる、これまでその一部を見てきたような数多くの類似からわれわれは、高句麗の神話伝説が全体として、スキュタイ人の神話から強い影響を受けていたにちがいないと想定できる。その高句麗の神など古代の韓半島にあった神話はどうぜん、当時韓半島と密接な交渉を持ち、あらゆる面で先進的だったその文化を受容する立場にあった日本の神話に、大きな影響を持った。それでそのことの結果として、日本の神話はスキュタイ神話と、まさにもっとも、肝心と思われる点に関して、本稿の3節で見たような著しい類似点と持つことになったのだと思われる。

日本の神話が事実、高句麗の神話から特に、もっとも核心的と言える点で、きわめて強い影響を受けていたことは、卑見によればまた、アマテラスの性質の分析によっても、この上ないほどはっきり確められる。なぜなら日本神話の最高女神として、その中央に位置しているこの女神には、いろいろな点で、高句麗の王家の祖母神の柳花と酷似したところがある。柳花の性質が、かなり大幅にアマテラスの内に受け継がれていることが、明らかだと思われるからだ。

河の神の娘である柳花のもっとも明白な性質は、言うまでもなく、水の女神であることだが、アマテラスの性質にはまずこの点でも、柳花と共通したところがあっさり認められる。アマテラスは事実、神話と祭祀との両面において、ほとんど水の女神と見なされてもよいと思えるほど、水ときわめて密接な結びつきを持っている。

アマテラスはまず、黄泉国から帰って来たイザナキが、死者の国で身体に付いた汚れを洗い落とすために、河の流れの中に入って身滌ぎをしたとき、最後に出生した三貴子の長子として、父神の左の目から生まれたとされている。しかも彼女がこのようにして、水の浄化力の働きによって、清浄無垢な処女神として、水中で誕生するその直前には、ソコツワタツミ、ナカツワタツミ、ウハツワタツミと、ソコツツノヲ、ナカツツノヲ、ウハツツノヲという、三柱ずつ二組の水神たちが、次々に出生したとなっている。

その上また、アマテラスが神話の中でしたとされている活躍の大部分は、天の安の河という、天上にあるとされている河と結びつけられている。アマテラスとこの天上の河とのあいだには、切って切り離すことのできぬ関係があることが明らかだと思われるのだ。

まずアマテラスは、男性との肉体の交わりは持たずに、皇室の男神たちの母親になった。そしてそれによって、純潔の処女のままで、皇室の祖母神になったのだとされているが、この奇蹟が起こった場所も、天の安の河辺であったと物語られている。

『古事記』に「故邇各中置天安河而，宇氣布時」と言われているように、アマテラスはこの河をあいだに挟んで、スサノヲと向かい合って誓約を立った。そしてたがいに持物を交換して、その交換した持物から、子の神たちを生み出し合った。それらの子神たちは、両神がそれぞれ相手からもらった持物を『古事記』に「奴那登母母由良邇 振滌天之眞名井而」と言われているように、天の眞名井という天上にある井戸の水で滌いでから、

「佐賀美邇迦美邇, 於吹棄氣吹之狹霧所成」と言われているように, 口に含人で口齒み礫いて吹き出した。霧の中に次々に誕生したとされている。

しかもこのときにアマテラスがまず先に, スサノヲから剣をもらって, その剣からこの神の子として誕生させたのは, 神岡顯の宗像神社に航海の神として祭られている, 三柱の水の女神たちだった。アマテラスの子の五柱の男神たちは, そのあとでこの女神が身に着けていた飾りの曲玉から, スサノヲによって出生させられたことになっている。

つまりアマテラスの子の神たちも, 母神と同様に, 河で水の浄化力の働きを明らかに蒙いながら, 異常な生まれ方をした。しかもアマテラス自身の誕生のすぐ前に, 一群の水の神たちが生まれたとされているのとまったく同様に, 彼女の息子の神たちの誕生場合にも, その直前にはやはり, 水の水の女神たちが生まれたことになっているのだ。

アマテラスと天の安の河との結びつきはまた, 天の岩屋の神話からも, はっきり確認できる。なぜならアテラスが岩屋に閉じ籠り世界が常夜になったときに, 天神たちは, 『古事記』に「是以, 八百萬神, 於天安之河原, 神集集而」と言われているように, この河の河原に集まった。そしてそこで知恵の神のオモヒカネが考案, た計画に従って祭りをして, アマテラスを岩屋から招き出すことができたと言われているからだ。

天の安の河はさらにまた, この事件のあとにアマテラスが高天原の女王として八百万の天神たちを指揮する, 女王権の働きとも明らかに, 切り離すことができない。なぜならアマテラスは必要が起こるとそのたびに, 『古事記』に「高御産巢日神, 天照大御神之命以, 於大安河之河原, 神集八百萬神集而」と言われているようにして, タカミムスヒと共に天神たちに命令しては, 彼らをこの河の河原に集合させる。そしてそこで天神たちに相談させては, アオモヒカネの口から述べられるその協議の結果を, その通りに実行させるからだ。

アマテラスがこのように, 水とりわけ河川の水と特別な結びつきを持

っていることはまた、この女神の地上での祭られ方からも、明瞭に確めることができる。なぜならまず伊勢皇大神官は言うまでもなく、五十鈴川の川上にあつて、そこでのアマテラスの祭祀はこの清流と、まさた切り離すことができない。また「元伊勢」とも、「大神の遙宮」とも呼ばれて、皇大神官の中で本官に次ぐ高い格式を持つ滝原宮もやはり官川の上流にあつて、アマテラスはここでも同じように、清流のほとりに祭られている。その上また『日本書記』には、壬申の乱の最中の六七二年六月二十六日の出来事として、次のようなことが記されている。

北伊勢を通り美濃に旬けて軍を進めつつあつた大海人皇子(後の天武天皇)は、前夜に寒さと疫勞の上に激しい雷雨にあつて、非常な難儀をしたあとで、この日の朝に、現在の三重縣シ重郡の朝明川の岸辺で、伊勢神宮を遙拜して、アマテラスに加護を祇つた。そのことは、「旦、於朝明郡迹太川辺、望拜天照太神」と記されている。『万葉集』199番の柿本人麻呂の長歌には事實、激戦の最中に伊勢神宮から猛烈な「神風」が吸吹いて来て、壬申の乱における大海人皇子の軍の勝利立助けたことが、「疫會乃 齋宮從 神風尔 伊吹或之 天雲乎 日之木毛不令見 尙闔尔 覆賜而 定之」と歌われている。つまりこのときに、大海人皇子が、これも清流の岸辺においてした祈願は、アマテラスに届いた。それでアマテラスは、この祈りに應之て實際に、戦闘の歸趨を決定するあらたかな加護を垂れたと、信じられていたことが明らかだと思われるのだ。

この事件からもこのように、清流の岸辺が、アマテラスに対する祭祀あるいは祈願のために、もっとも適當な場所と考之られていたことが、はっきり分かる。

このようにほとんど水ことに河川の水と明らかに、密接な結びつきを持っている一方で、アマテラスはまた、農業ともきわめて関係が深い。『日本書記』には、アマテラスの第で月神のツクヨミがあるとき、地上で體內にさまざまな食物を無層藏に持っていたウケモチという神を殺すと、

その死體のいろいろな部分から、五穀と蚕と牛と馬が発生した。アマテラスはそれらを、アマノクマヒトという神を地上に派遣して取つて來させた。そして農業と養蚕を創始したという神話が、記されている。その結米にはアマテラス自身によって、農業と養蚕が創始されたことが、こう書かれている。

于時、天照大神喜之曰、足物者、則顯見蒼生、可食而活之也、乃以粟稗毒豆、爲陸田種子。以陷爲水田種子。又因定天邑君。即以其稻種、始殖于天狹田及長田。其秋垂穎、八握莫莫然、甚快也。又口裏含蛭、便得抽糸。自此始有養蚕之道焉。

つまりこのときにアマテラスは、五穀のうちの粟と稗と毒と豆とを、「これらは人間の生命の糧の食物となるべきものだ」と言って、畑の作物にした。そして稲はそれらと區別して、田の作物にした上で、その栽培をまず天上で始めることにし、そのために天神の中から、稲作を指揮する村長の役をするものを任命した。そしてさっそく天上に田を作らせ、稲を育てさせたところが、その年の秋には、穂が長く垂れてしなうほど、豊かな実りが得られた。アマテラスはまた、蚕を自分の口の中に入れて、それから絹糸を引き出し、それが養蚕の嚙矢となったと言われているわけだ。

アマテラスと稲作との關係の深さはまた、スサノヲが天上でしたとされている、この女神に対する乱暴のことを物語った話からも、きわめて明瞭に知られる。『古事記』によればスサノヲは、「離天照大御神之營田之阿、埋其溝」と言われているようなやり方で、アマテラスが天上に作らせていた稻田をさんざんに荒らした。その上また「亦、其於聞看大嘗之殿 屎麻里散」と言われているようにして、その稻田で收護される新穀を、アマテラスが賞味する神聖な祭りのために、準備されていた於殿を大便によって汚したと物語られている。

このようにして天上の田で作らせ、自身が象味していた稲の種をアマ

テラスは、太子のオシホミミに授けた。そしてそれを持って地上に、葦原中國の支配者になるために降りて行くように命令した。『日本書記』にはアマテラスがそのとそかきに、「以吾高天原所御齋庭之穗，亦当御於吾兒」と、厳かに宣言したと記されている。

ところがちょうどそのときに、オシホミミクの妻の女神ヨロヅハタヲカヒメが、子を生んだ。それでそのアマテラスの孫に当たる、ホノニギが、父の代りに地上に降らされることになった。そしてアマテラスからまたあらためて、三種の神器などと矢に稲の種も授かって、日向の高千穂の峯に降りて来て、皇室の祖先になったのだとされている。

『日向國風土記』の逸文によれば、このときに地上はまだ夜と層の區別もなく、物の識別もできぬ暗闇の状態だった。だがそこに降りて来たホノニギが、迎えた土地の神たちの勧めに従って、沢山の稲の穂を手で揉んで糲にして播き散らすと、たちまち太陽と月が空に輝いて、世界を明るく照らすようになった(「瑳千穂稻，爲糲投散 即天開晴 日月照光」と言われている)。

三品彰英によってもすでに指摘されているようにこの話は²⁵⁾、柳花が朱蒙に五穀の種を授けたという、前掲した『旧三国史』の記事の中の高句麗の話と、明らかに酷似している。なぜならどちらの話でも、王家の祖母神が、その王家の始祖となる運命を持った自分の子あるいは孫を、故郷から遠くになっているからだ。この類似くに照らして見るならば、アマテラスに見られるこれまで見てきたような農業とのきわめて、深い結びつきもやはり、他の多くの点でもこの女神の原形と目せる柳花から、継承されたものであることが明らかだと思われる。

25) 三品彰英『建國神話の諸問題』(『三品彰英論文集』、第2巻)、平凡社、1971年、209頁。